敵の巨艦を海底に!敵の領土に日の丸を!　　滋賀県蔵

ポスター「少年航空兵募集」を見る子どもたち（日光写真種紙）　　個人蔵

テーマ展

平和のいしずえ　2006

2006年7月23日(土)～8月27日(日)

栗東歴史民俗博物館では、栗東市の「心をつなぐふるさと栗東」平和都市宣言をうけて、平成3年度から戦争と平和をテーマにした「平和のいしずえ」展を毎年開催しています。この展覧会は、市内外のみなさまからご提供いただいたた多くの資料を中心に展観するものです。展示は毎年違ったテーマを設定して構成しておりますが、本年は主にアジア・太平洋戦争期に作成されたポスターを中心に取り上げました。ポスター制作の背景はそれぞれに異なりますが、いずれのポスターにも戦時色が色濃く現れています。こうしたポスターが氾濫し、人々が戦争に邁進していった時代があったことを、この展覧会を通じて知っていただくことで、みなさんに戦争と平和について考えていただく契機となればと考えます。そして新しい時代の「平和のいしずえ」を築く一歩としていただければ幸いに存じます。

栗東歴史民俗博物館

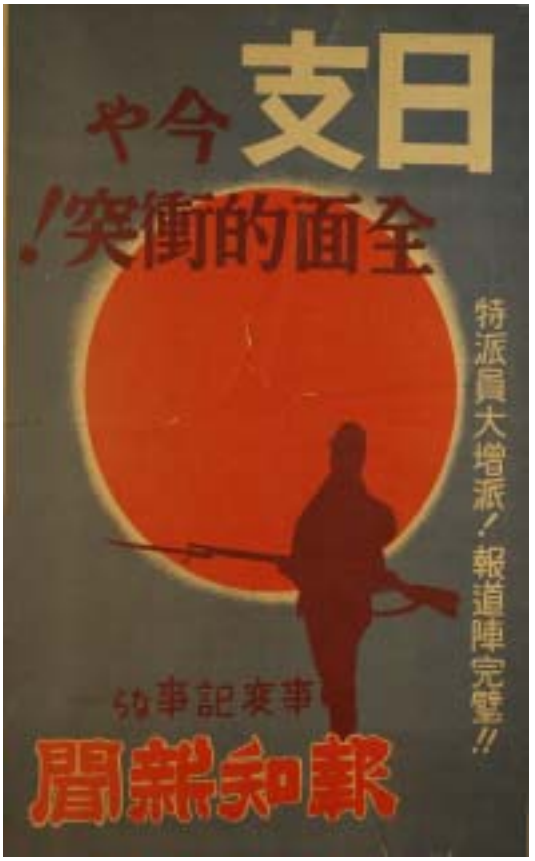
主催・栗東市　栗東市教育委員会　後援・滋賀県

昭和初期、世界恐慌により日本の経済は大きな打撃を受けた。日本は中国東北部に進出することでこの混乱を打開しようとした。昭和6年(1931)、中国東北部、日本がその権益を有する南満州鉄道路線で爆破事件を起こし、これを中国国民党の仕業であるとして周囲一帯に軍隊が進出、占領した。翌年3月には日本の傀儡国家「満州国」を建国した。こうした日本の行為は大きな反発を買い、昭和8年(1933)、国際連盟において中国から撤兵するよう求められた。これに反発した日本は国際連盟を脱退、日本は国際社会から孤立の度を深めることになる（満州事変）。満州事変は一旦、昭和8年3月に締結された塘沽(タンクー)停戦協定で収束、日本の軍事行動は一旦終了した。

当時、中国大陸では孫文を中心とした中国国民党が清朝を倒し中華民国を樹立したものの、以後の覇権争いのなかで中国共産党が成立、国民党と共産党との間で勢力争いが続いていた。満州事変以後、日本はこうした中国大陸の混乱を拡大させることで、満州国を中心に大陸での利権拡大を画策するようになる。そうした中、昭和12年中国と日本の武力衝突する事件が起こった（盧溝橋事件）。この事件をきっかけに、中国と日本での戦闘が始まった（日中戦争）。

向着　復興　邁進
昭和6～20年(1931～1945)ころ　　滋賀県蔵

日本と満州の国旗が掲げられ、日本軍兵士が見守るなか、満州国の男性たちが材木を切る、というデザイン。満州国では日本・満州・朝鮮・漢・蒙古の五つの民俗が協力して理想国家を作る「五族協和」を謳っていて、本資料にも描かれる満州国旗の五つの色は、それぞれ



日支今や前面衝突!
昭和12年(1937)ころ　　滋賀県蔵

昭和6年の満州事変以来、日本は満州（いまでいう中国東北部）での権益をめぐって、中国大陸へ進出していたが、ついに昭和12年7月、中国との間で全面戦争へと突入した。特派員増員をアピール、事変の記事なら報知新聞を、と売り込む

昭和16年(1941)7月、日中戦争が決着を見ないなか、日本はフランス領インドシナ（現在のベトナム・ラオス・カンボジア）へ兵を進めた。これには、日本がこの地域から中国大陸へ抜けるルート（援蒋ルート）でアメリカやイギリスが蒋介石が束ねる中国国民党へ兵器や物資の支援を行っていると見ていたからである。この進軍はこうしたルートを断つと同時に、フランス領インドシナの先にある、オランダ領インドシナ（現在のインドネシア）の石油などの資源を獲得する目的も併せ持っていた。こうした日本の行動に対してアメリカは自国からの石油の全面的輸出禁止という厳しい態度で臨んだ。日本とアメリカの間が険悪となる一方で、外交によってこうした状況を収拾しようとする動きもあったが、日米間の交渉の場において打開策は見つかることなく、12月8日、日本はアメリカ真珠湾を奇襲攻撃、日本はアメリカをはじめイギリスや・オランダを相手に戦争を行うこととなった。

敵の巨艦を海底に!敵の領土に日の丸を!
昭和16年(1941)　　滋賀県蔵

ポスターを制作した情報局は昭和15年に組織された、国の情報・宣伝・文化等の統制にあたる機関。おおよそB1版という大型の紙面に、煙をはいて砲を発する軍艦のモノクロ写真に被せて赤と白の文字で、勇ましい言葉が踊る。情報局をはじめ、大政翼賛会などが戦意高揚を狙って作成したこれら戦時中のポスターは、写真の構成、文章、文字の配置、文字の字体、そしてその効果にいたるまで、よく考えて作られている。

この備へこの構へ!!!（参考資料）
昭和16年(1941)　　滋賀県蔵

上と同じく情報局が制作したポスター。支那事変四周年と記されることから、アジア・太平洋戦争開戦直前に制作されている。「この備へこの構へ」と題して、着々と製造を続ける軍需工場の様子を写真で示す。また、地図にはベルリン・ローマなど同盟国の首都とともに、このときすでに進駐を始めていた南方の地域が記される。こうした日本軍の動きは、アメリカを刺激するもので、アメリカからの石油やくず鉄の

昭和12年(1937) に日中戦争が、ついで昭和16年 (1941) にアジア・太平洋戦争が開戦すると、非常事態を理由に日本では衆議院選挙が実施されていなかったが、昭和17年(1942)4月、東条英機内閣のもと、戦時下ではじめて衆議院総選挙が実施されることとなった。ところが、この選挙では、実質的に政府が推薦する候補者を選び、非推薦候補者に対しては、選挙活動に干渉し、妨害する不公平な内容となった。選挙は当選者の大半が推薦後補となる結果となり、選挙後は、多くの政党が解散し、当選者と貴族院議員の大半が、東条首相の主導のもと設立された翼賛政治会に参加することになる。こうして、戦時下の議会は政府のいいなりとなる状態となった。

こうした選挙が行われた背景には、大日本帝国憲法下の議会と内閣との関係がある。大日本帝国憲法下では首相の任命は天皇の親任によっていたため、議会の承認を得ずとも首相就任が可能であり、政府と議会の意見が必ずしも一致するものではなかったからである。特に、昭和11年 (1932) に起こった2.26事件の結果、軍部大臣現役武官制が復活され、軍部の政治介入を容易にさせる体制となった。軍部の思い通りになる政府が作られるようになると、戦争遂行をよりスムーズに行える議会が求めるようになった。こうして、昭和17年の総選挙、いわゆる翼賛選挙は行われたのだ。

選べ適材　貫け征戦
昭和17年(1932)ころ　　滋賀県蔵

昭和17年に実施された衆議院総選挙いわゆる翼賛選挙に際して、大政翼賛会愛知県支部が作成したポスター。この選挙では、実質的に政府が推薦する候補者を選び、非推薦候補者には選挙活動に干渉するなどした、不公平な選挙であった。選挙の結果、当選者の大半を推薦候補が占めることになり、選挙後には衆議院・貴族院のほとんどの議員が翼賛政治会に組織され、議会は政府のいいなりになる状況となった。

畏みて奉答いたしませう
昭和17年 (1942) ころ　　滋賀県蔵

昭和17年に行われた翼賛選挙の際のもの。「こんどの選挙は大東亜戦争完遂の鉄石の決意を示す翼賛選挙だ」の言葉のと

郷軍先駆至誠一票
昭和17年(1942)ころ　　滋賀県蔵

昭和17年に行われた翼賛選挙の際に、帝国在郷軍人会本部が作成したポスター。「断じてけがすな国土と選挙

日中戦争開戦以来、昭和13年（1938）には国家総動員法が制定され、国民生活にも戦争が影を落とし始める。長期化した戦争で、膨れ上がる戦費を政府は増税のほか、国債の発行によって調達した。国民は隣組などの単位で国債の購入を割り当て、国民に国債購入を強制した。度重なる国債発行により、国民の国債購入が鈍り始めると、昭和18年（1943）には現金で貯金、引き出す際には国債で支払いする、という国債貯金制度が定められた。長引く戦争で不足する戦費を、政府は国民になかば強制する形で、求めたのだ。

国債の購入に代る新貯金　国債貯金制度生る
昭和18年（1943）ころ　　滋賀県蔵

戦争遂行には莫大な戦費が必要であった。日中戦争開戦当初は、増税などで対処されたが、次第にそれでも不足するようになった。こうした不足分を補うために、政府は国債を乱発し、国民にその購入を求めるようになった。とはいえ、日中戦争から6年が経過すると、国民の国債の購入も次第に鈍るようになった。ポスターに「国債の購入に代る新貯金」とあるように、国が新たな戦費調達手段として創設したのが、国債貯金制度。ポスターの図柄にもあるように、現金を貯金させ、それを払い戻す際には国債で行うというもの。アジア・太平洋戦争での敗戦後、こうした国債は紙切れ同前となり、国民は多大な損害を受けた。

国債を買ひませう　　滋賀県蔵

国防献金の為め　煙草週間
滋賀県蔵

滋賀県煙草小売人組合連合会が作成した煙

昭和12年（1937)の開戦以来、戦況が好転しない日中戦争では多くの負傷兵や戦死者が出た。こうした兵士やその遺家族に対する支援を政府は国民に対しても求めた。農村では、特に一家の主な労働力であった男性が兵士となり故郷を離れるだけでもその一家の負担は非常に重いものとなったのだ。地域の人々は遺家族のほか、出征兵士の家に対しても、田植えや草取りなどの農繁期には作業を手伝った。国民は、地域のなかで年齢や性別によって青年会・処女会・婦人会・在郷軍人会などの組織に属しなければならなかった。こうした組織ではそれぞれに戦争支援活動を行っていて、婦人会などでは慰問品の発送などがその活動としてよく知られている。こうして国民は戦争を支援してしまう結果となったのだろう。

護れ興亜の兵の家
昭和14～20年(1939～1945)ころ
滋賀県蔵

軍事保護院と軍人援護会が作成したポスター。前者は昭和14年、後者は昭和13年に設立された、軍人・軍属・遺家族の援護団体。働き盛りの男性を戦地へ送り出すことは、家族にとっては大きな痛手であった。地域では隣組、婦人会、学校などの組織で、こうした家庭（＝興亜の兵の家）の農作業などを手助けする運動が盛んに行われた。

英霊を偲び遺族を護りませう
昭和14～20年（1939～1945）ころ
滋賀県蔵

英霊＝戦争で亡くなった兵士を偲んで、その遺族を保護しようと呼びかけるもの。遺族の母子の向こうに、近代以降の英霊を祀る靖国神社のニの鳥居、神門の風景を描く。

湧き立つ感謝　燃え立つ援護
昭和14～20年(1939～1945)ころ
滋賀県蔵

はためくいくつもの日の丸に、はみ出さんばかりに記される「沸き立つ感謝…」の文字。見る人の気分の高揚を誘うデザインとなっている。

一家の幸福　魔法焜炉
アジア・太平洋戦争期　　滋賀県蔵

焜炉のポスターに「銃後の護りは台所から」と記される。銃後とは、戦場の後方の意味であるが、アジア・太平洋戦争期には、前線の兵士に対して、国内で後

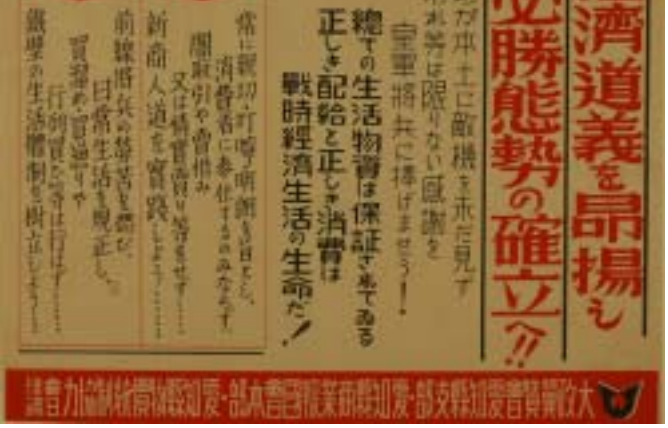
昭和16年（1941）に始まったアジア・太平洋戦争の戦局は、昭和17年6月のミッドウェー海戦での敗退を機に次第に不利な状況となった。また同年8月に始まったガダルカナル島の攻防戦では、翌年2月に敗北、制海権・制空権を失った。石油をはじめとする南方からの物資の輸送が困難となり、戦争を継続するための燃料や、兵器の原材料となる金属を始めとするさまざまな物資が不足するようになった。不足の度合いは時間の経過とともに深刻になり、軍需物資の増産を叫ぶポスターが数多く制作された。栗東の村々でも、飛行機や船の燃料となる石油の代わりとなる、松根油の採集と精製が行われてた。また、辻鋳物師の本貫地である栗東からは、彼らが制作した村々の梵鐘などが数多く供出された。

たのむぞ石炭
昭和19年(1944)ころ　　滋賀県蔵

飛行機増産総決起!
昭和18年(1943)ころ　　滋賀県蔵

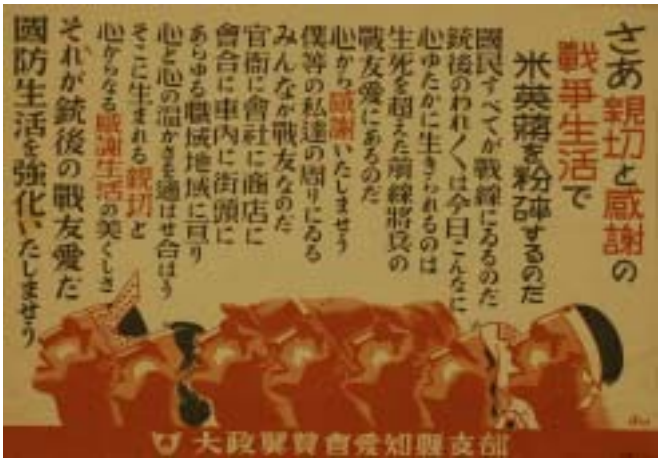
荒鷲のために莵麻を栽培しよう!
アジア・太平洋戦争期　　滋賀県蔵
アジア・太平洋戦争の戦局の悪化にともなって、石油や金属は目に見えて不足するようになった。上は、燃料となる石炭の増産を叫ぶもの。下は荒鷲＝陸軍の戦闘機の潤滑油の代用品であるヒマシ油を取るために莵麻の栽培を訴えるもの。

トイシも兵器だ!
アジア・太平洋戦争期　　滋賀県蔵
砥石は武器を研磨するのに使う。直接的な軍需品でなくとも戦争とのつながりを強調するポスターが作られた。

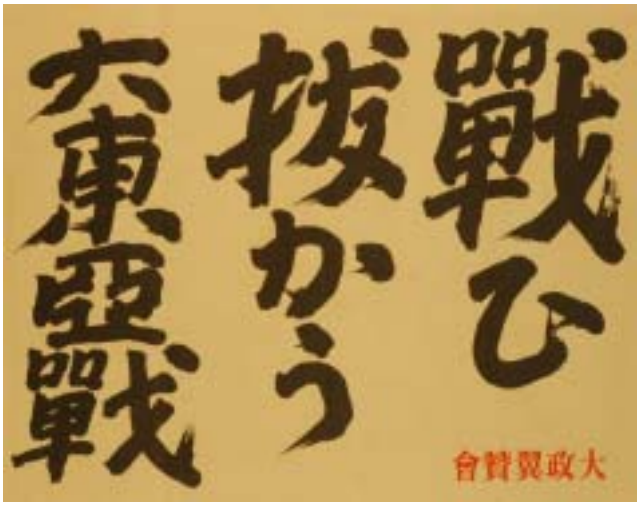


経済道義を昂揚し必勝態勢の確立へ!!
昭和15～20年（1940～1945）　　滋賀県蔵

今ぞ全土戦場!
昭和18年（1943）　　滋賀県蔵



さあ親切と感謝の戦争で米･英･蒋を粉砕するのだ
アジア･太平洋戦争期　　滋賀県蔵



戦ひ抜かう大東亜戦
アジア･太平洋戦争期　　滋賀県蔵

主な参考文献

『館蔵品図録　戦時下のポスター』　岐阜市立博物館　1998年
『「撃ちてし止まむ」太平洋戦争と広告の技術者たち』　難波功士　講談社　1998年
『世界を動かしたポスター』上条士郎　日本工業新聞社　1979年
『戦争と宣伝技術者』　山名文夫ほか編　ダヴィッド社　1978年

謝辞

本展開催にあたっては下記の方々のご協力･資料提供を得ました。記して謝意を表します。
五百井神社　滋賀県　辻自治会
青木和博　青山實　安土峰男　大隅喜代司　大隅兵治　奥村嘉雄　大町ゑい　片岡兵右衛門　北川隆　水野清　北野春子　里内定雄　山口和男　中川三治郎　堀池栄一　西田耕之助　西田博　野田源一（50音順敬称略）

凡例

1. このパンフレットは、平成18年7月23日（土）から8月27日（日）までを会期とする、栗東歴史民俗博物館のテーマ展「平和のいしずえ　2006」のパンフレットである。

テーマ展「平和のいしずえ　2006」

会　　期●平成18年7月23日(土)～8月27日(日)
編集発行●栗東歴史民俗博物館
滋賀県栗東市小野223-8